

# 職業道化 Touchstone

西 野 義 彰

1

Shakespeare の喜劇の中で最も牧歌的でロマンチックな喜劇といえる *As You Like It* に、道化 Touchstone が重要な役割を担って登場する。彼の道化としての特徴や演劇的機能について考察する前に、この喜劇そのものの特色や主題などについてある程度理解しておく必要がある。

この喜劇の筋は比較的単純で、第1幕では兄の Oliver と弟の Orlando が不和の状態にあり、前者は美徳と人望のある弟に恨みを抱いていて、特に Orlando がレスリングの試合に勝った直後から、弟の命を狙うまでになる。危険を避けるため彼は忠実な老僕 Adam とともに、直ちにアーデンの森に逃げることにする。一方、善良な兄の公爵を追放し、その地位についている Frederick 公爵の宮廷に、娘の Celia と姪の Rosalind が姉妹のように暮らしているが、姪の人気と美徳のために娘の影が薄くなり、公爵は Rosalind に追放命令を下す。一心同体の二人は、道化 Touchstone を連れて、身の安全のために変装するとともに名前も変えて、アーデンの森に向かうことになる。2幕以降はこの森が舞台となり、追放された公爵や彼を慕って集まってきた臣下たちが、宮廷での出世欲、追従、陰謀などから解放され自然を友として静かな生活を送っている。無事に森に辿り着いた Rosalind らは間もなく牧草地を買い取り新たな生活を始め、他方、老公爵らに救われた Orlando たちもすぐに森の中で安定した生活に入る。それ以後、5幕の終わりで結婚の神 Hymen が登場し4組のカップルがめでたく結婚し幸福な結末を迎えるまで、人物たちの目立ったアクションはあまり見られない。中心となるのは Rosalind に対する Orlando の情熱的でロマンチックな恋と、男装した Rosalind の Orlando に寄せる告白しがたい切ない想い、それに、主人公たちの間で展開する散文を主体とした機知に富んだ対話である。羊飼いの Silvius も Phebe に対して韻文で情熱的な愛を語るが、Orlando や Silvius らの非常に純粋な恋は、道化かつ現実主義者 Touchstone にとって格好のからかいの対象になる。道化としての彼は、ユニークな形で森での恋愛遊戯に参加する。ヒロイン Rosalind の男装によって何度か滑稽な誤解や混乱が

生じるが、最終的にはヒロインの活躍でもつれた糸がほぐれ、また、悪役の Frederick 公爵や Oliver たちが森の中やその近辺で突然改心し、この劇は幸福な結末を迎える。これが全体の大まかな筋である。

この劇を書くにあたって Shakespeare は少なくともいくつかの資料を参考にしたようであるが、作者にとって最も重要なものは Thomas Lodge によって書かれた散文ロマンス *Rosalynde* であるといわれている。<sup>1)</sup> Shakespeare は種本の筋をかなり取り入れ、不要な部分は大胆に削除や修正をし、他方で Touchstone や Jaques など個性的な人物を新たに創造して、種本とは大いに異なる喜劇を書き上げた。この作品は従来 Shakespeare の喜劇の中で非常に評価が高く、Helen Gardner は同じ作者による喜劇の中で「最も洗練された精巧な劇」<sup>2)</sup> であると論じ、Patrick Swinden も同様の立場で「最も完成されている」<sup>3)</sup> 作品と考える。Peter G. Phialas は、この劇において作者のロマンチックな形態がこれ以上発展しえないほど見事な形に達したと述べ、<sup>4)</sup> C.L. Barber もこの劇は「Shakespeare あるいは他の誰であれなし得た最高の完成度を示す均衡の表現」<sup>5)</sup> であると述べている。また、John Wilders は、それ以前の作品との関係で見ると、この劇において一つのプロセスの完成が見られると論じる。<sup>6)</sup> この劇において作者は、様々な人物のアクションに満ちた複雑な筋の運びには関心をもっていない。アーデンの森を一種の理想郷 (Arcadia) に設定し、牧歌的な雰囲気の中で Rosalind と Orlando の恋愛を中心に、いくつかのレベルの愛の形を行動よりも言葉で語らせることにある。一種の理想郷とはいっても、この森は本来のパストラル (牧歌劇) の特徴である、永遠の春が支配する無時間の楽園ではなく、冬の厳しさや逆境が何度か強調され、人々は生活のために鹿 (venison) を殺すこともある。<sup>7)</sup> また、この森では ‘clock’ こそ無いものの、時間と人間のはかなさについて、道化の

And so from hour to hour, we ripe, and ripe,  
And then from hour to hour, we rot, and rot,  
... (2.7.26-7)

という言葉を中心に劇中何度も言及され、ここが決して真の理想郷ではないことが観客に伝えられる。しかし、そこでは一連の出会いが中心となり物語の進行が止められるという印象を与えるので、D.J. Palmer が言うように、そのこ

とが 'sense of timelessness'<sup>8)</sup> を生み出すことになる。また、そこでは宮廷から逃れてきた者を含めほとんどの人々が、「普通の日々」(this working-day world, 1.3.12) から解放され、「休日の気分」(a holiday humour, 4.1.65) で素朴かつ穏やかな生活をおくっている。アーデンの森は、Oberon や Puck などの妖精が住み、職工の Bottom がグロテスクな姿に変えられる *A Midsummer Night's Dream* の森ではない。この劇の第1幕は、運命のいたずらと悪役の冷酷な仕打ちにより難を逃れるため、主人公たちに悪意に満ちた宮廷や町を脱出させ森へと急がせる情況作りの役割をもっている。

恋のテーマはすでに1幕から始まっているが、2幕で羊飼いの Silvius が恋人の Phebe に対する熱烈な想いを韻文で大げさに吐露する形で前進し、3幕で Orlando が一目惚れした Rosalind への情熱的な想いをへたな詩に綴り、森のあちこちに告白することで本格的に展開する。Kenneth Muir は、この劇における最も素晴らしい場面はアーデンの森での Rosalind と Orlando のそれであると述べているが、<sup>9)</sup> その通りである。作者はこれまでの作品で文体を含め様々な実験を行なっている。As You Like It 前後の喜劇や喜劇を含む歴史劇では、それぞれの作品において散文がかなり高い比率で用いられており、<sup>10)</sup> この頃の作者は喜劇においては無韻詩より散文のほうが、主人公たちの個性豊かな性格造形や生き生きとした会話には、はるかに有効な媒体であると理解していたようである。概して、散文は喜劇的な場面や身分の低い猥雑な人物たちに用いられる。Henry IV, Part One & Part Two では、あのほら吹きで臆病かつ好色の、限りない魅力を持った巨漢 Sir John Falstaff がきわめて自然で生き生きとした散文を話して観客を魅了した。当面の喜劇では、初期の作品 *Love's Labour's Lost* の生硬でごつごつした散文とは異なり、作者はかなり進歩発展した散文を主人公たちに語らせている。

脇役の Silvius は Phebe に対する愛を情熱的に韻文で表現する。パストラルではたいてい羊飼いや農民が主役を演じるが、この喜劇では彼らは主役ではないものの常に韻文を話している。作者は、彼らの韻文による熱烈な求愛と冷たい拒絶というパストラル特有の愛を、一つの典型的な形に持っていく。甘美で理想的な愛の世界にひたろうとする恋人たちの愚かさは、冷めた現実的な視点の人物たち、特に道化によってからかわれ批判される。アーデンの森にあって人間に興味を抱きながら人を避け、孤独とメランコリーを愛する Jaques もこの劇では重要な存在で、他の人物とは異なる視点で物事を捉え、劇そのものに

幅と広がりを与えている。様々な問題—Orlandoの恋の成就、Rosalindと老公爵との再会、Rosalind—Phebe—Silviusの三角関係、OliverとCeliaの結婚などを解決し大団円へ持っていくには、この劇の中心人物Rosalindが男装を放棄し本来の姿を現すこと、及び、結婚の神Hymenの力を借りることが必要になる。最終的に、Hymenと本来の姿に戻ったRosalindの登場によって、この劇は4組の結婚と調和という形で幸福な結末を迎えるが、その解決の方法はやや恣意的で、観客に虚構性を意識させる。この劇の虚構性という点では、5幕でOliverが突然改心しCeliaとの結婚を決めたり、Frederick公爵もあまりに突然心を改め世捨人として生きることを決意するなど、いくつか指摘できる。一方、人生(=現実)と芝居(=虚構)の緊密な相互関係については、2幕7場における老公爵の言葉、

This wide and universal theatre  
Presents more woeful pageants than the scene  
Wherein we play in. (137-9)

やJaquesの有名な台詞、

All the world's a stage,  
And all the men and women merely players.  
They have their exits and their entrances,  
And one man in his time plays many parts,  
...

(139-42)

によって観客に伝えられる。作者はこの劇が虚構であることは最初から認識している。他方で、役者によって舞台上で演じられることで、虚構の世界に生命と真実(リアリティ)が生まれ、観客は目の前で展開する芝居の中に、人間の根源的な姿や人生の実相の一面を認め、その世界に参加しともに考えさせられるという、芝居のもつ不思議な力を劇作家として理解している。その上で作者は、アーデンの森という牧歌的な世界で、多様な価値観の人物たちにいろいろな話題について、特に人生と愛についてのびやかに語らせ行動させた。劇である以上、そこに虚構的、恣意的要素は避けえない。それは劇の終わり方にも言える

ことで、作者はあえて我々が見るような方法を選んだ。Anne Barton は劇の結末について、「リアリズムとロマンスを結合させるやり方において見事である」<sup>11)</sup>と高く評価している。この劇の喜劇的な効果に関して、その多くは‘swift interplay of perspectives’<sup>12)</sup>からくると Alexander Leggatt は述べているが、確かに人物たちの派手なアクションや巧みな筋の展開よりも、様々な人物たちの見解の相互作用が滑稽な効果を生み出している。作者はパストラル文学の伝統を受け多くのコンベンションを採用しつつ、他方でそれらを茶化すためにバーレスクの要素を多分に盛り込むことで、まさに Shakespeare 的で明るいロマンチックな喜劇を完成させた。

## 2

エリザベス朝の舞台を陽気に跳ね回ったり倒れたりする、最初の真に賢明な道化（阿呆）<sup>13)</sup> Touchstone は、1 幕 2 場で初めて登場する。彼は Celia によって ‘this fool’ と言及され、それ以後も他の人物から ‘motley fool’, ‘Motley’, ‘the motley-minded gentleman’ などといわれたりするが、名前で直接呼ばれるのは劇中 3 回のみである（2 幕 4 場、3 幕 2 場）。作者がこの道化に何故このように命名したのかは、作者が幹部の一人であり座付き作者をしていた宮内大臣一座における、この頃の喜劇役者の交替と関係があるかも知れない。それまでその劇団の喜劇役者であった Will Kempe が、1599年の早い時期に退団し、その後彼とはまったく異なった才能と美声の持ち主である Robert Armin という喜劇役者が入団したようである。作者は Armin のためにこの道化をはじめ、*Twelfth Night* の Feste、*All's Well That Ends Well* の Lavache、*King Lear* の Fool といった道化役を創造したと考えられている。Armin は金細工職人になるための修業をしたことがあり、教養と知性もあったので劇やパンフレットを自らいくつか物したり、自作の人物を舞台上で演じることもあったといわれている。<sup>14)</sup> Kempe は即興で笑いを取る道化役者で、彼が演じた人物の中で代表的なものが言葉の取り違いをよくやる Dogberry である。一方、Armin は歌を歌ったり賢と愚を絶妙に調和させた機知に富む道化役が得意であったようである。当面の喜劇がいつ書かれたのかについて確かな証拠は無いようだが、おそらく Armin が入団した直後と考えるとよいのではないか。この劇では歌が何回か歌われるのに道化が一度も歌わないのは、当時の劇団の事情によるのかもしれない

い。<sup>15)</sup> 彼は自作の *Two Maids of More-clacke* に出てくる滑稽な召使 Tutch を演じ拍手喝采を受けたといわれ、彼が金細工職人をかけて目指したことも考え合わせると、Shakespeare が Tutch から Touchstone という名前を思いついたという説<sup>16)</sup> はかなり有力に思われる。周知のように、その名前には「試金石」という意味があり、試金石とは貴金属をすりつけてその金属の品位を判断するための黒くて堅い石のことである。つまり道化 Touchstone は、彼の前に現われるすべての人物たちの価値や品性、さらには劇世界そのものを試すという役割、John Palmer 的な言い方をすれば、「自分を含め、すべての人物や物事を滑稽なテストにかける」<sup>17)</sup> という重要な役割を担って登場していることになる。

2幕7場で、Jaques が森で道化を見かけた時の驚きを老公爵に報告する時、

A fool, a fool! I met a fool i'th'forest,  
A motley fool: a miserable world! (12-3)

と言っていることから、彼は「まだら服」(motley)<sup>18)</sup> を着ていて他の人物と区別がつく服装をしていた。第1幕では彼は Rosalind たちから「自然の女神が作った阿呆」(Nature's natural), 「砥石」(whetstone) などとからかわれ、まだ彼らしさは発揮できていない。

Rosalind と Celia に随行して森に着くと、彼も疲労しているはずであるが、機知に富む道化として本領を発揮しはじめる。Celia が「これ以上動けないので許して」(I pay you bear with me.) と言うと、彼はさっそく 'bear' をいろんな意味に用いて洒落を飛ばす。

For my part, I had rather bear with you than bear you; yet I should bear  
no cross if I did bear you, for I think you have no money in your purse.  
(2.4.9-11)

ここでは 'bear' は「耐える」、「運ぶ」、「持つ、手に入れる」という意味で使われ、'cross' には「十字架」及び「十字架が刻まれている当時の銀貨」<sup>19)</sup> という意味が込められている。すぐ後に羊飼いの Corin と Silvius の恋についての真剣な議論を立ち聞きした時、Touchstone も昔の恋の経験を回想し、Silvius の情熱的な恋を茶化し転倒させるように、滑稽でばかげた面を強調して言う。

I remember when I was in love I broke my sword upon a stone, and bid him take that for coming a-night to Jane Smile; and I remember the kissing of her batler, and the cow's dugs that her pretty chopt hands had milked; ...We that are true lovers run into strange capers; but as all is mortal in nature, so is all nature in love mortal in folly. (43-53)

恋する者はその病ゆえに様々な狂態を見せ、彼自身も例外ではない。彼らしいのは、甘美な恋を意図的に滑稽でばかげたレベルに引きずり下ろし、自分をあえて笑いの対象にするとともに、最後の2行で巧みに言葉遊びを交え、「この世ではすべてが死を避けられないように、恋する者は愚行を避けえないのだ」と、格言風に台詞を見事しめくくる点にある。Rosalindは道化の知恵に驚きながら、「お前は自覚している以上に賢いことを言うのね」と言うと、彼は

Nay, I shall ne'er be ware of my own wit, till I break my shins against it.  
(55-6)

と、‘ware’に「気付いて」と「用心深い」の2重の意味を込めユーモラスに返答する。この辺の彼の言葉を見ても、彼は「生まれながらの阿呆」とはっきり区別される賢明な「職業道化」であることが分かる。

憂鬱家のJaquesは、この劇のためにShakespeareが創造した個性的な人物の一人で、台詞の量も比較的多く道化に劣らず重要な役割を果たしている。彼の場合、不機嫌になればなるほど面白いことを話し、皮肉屋、冷笑家としての鋭さに磨きがかかる。笑いとは無縁の彼も、森でまだら服の道化に偶然出会い話をした時、その言葉と見かけとの間の不釣り合いや口にする言葉の意外性ゆえに、心の底から大笑いしたことを老公爵に報告している。

*Jaques.*                                 ... When I did hear  
The motley fool thus moral on the time,  
My lungs began to crow like chanticleer,  
That fools should be so deep-contemplative;  
And I did laugh, sans intermission,  
An hour by his dial. O noble fool!

## A worthy fool! (2.7.28-34)

最初 Jaques が ‘motley fool’ に期待したものは、阿呆のとりとめのない話、駄洒落、卑猥で下品な振る舞いなどで、この世の無常について真面目腐った表情で語るなどということは予想外のことであった。まだら服は愚かさ、無秩序や混沌の象徴であり、それを身につけた道化が賢明なことを話すという矛盾に彼は感動した。Jaques はまだら服に憧れるが、それを手に入れたところで放蕩者（2幕7場）として生きてきた以上、他人の罪悪を非難はできても道化の真似はできそうにない。

Touchstone は目上の人に対して何ら遠慮はないが、羊飼いいには尊大な態度でのぞみ、屁理屈をこねた分かりにくい論法を取る。Corin に森の暮らしについて聞かれると彼はこう答える。

Truly shepherd, in respect of itself, it is a good life; but in respect that it is a shepherd's life, it is naught. In respect that it is solitary, I like it very well; but in respect that it is private, it is a very vile life. Now in respect it is in the fields, it pleaseth me well; but in respect it is not in the court, it is tedious. As it is a spare life, look you, it fits my humour well; but as there is no more plenty in it, it goes much against my stomach.  
(3.2.13-21)

結局のところ、Touchstone は今の生活が気に入っているのか否かはっきりしない。その言葉と論法は学者的に聞こえるが、そこに内容は何も無い。あるのは、田舎の素朴な人間に対する彼一流のおどけなのである。さらに宮廷対田舎の話題で、彼は相手を煙にまくすばやい論法で質問を浴びせ、Corin をやり込めようとする。しかし、Corin には単純素朴ながら自分の哲学があって、道化の意地の悪い攻撃もほとんど効果なく空振りの感がある。R.P. Draper は二人の対話に関して、ブーメランのイメージを用いて次のように述べている。「Corin との議論で Touchstone は宮廷の自負を批判的にさらけ出すとともに、そのよりすぐれた洗練さを守る人でもある。田舎に対する宮廷の、自然に対する芸術の勝利はブーメランとなって、笑いを田舎のみならず宮廷にも向けることになる。」<sup>20)</sup> Touchstone の Corin に対する “Most shallow man!” という辛辣な言葉



は、すぐ後で彼自身に舞い戻ってくるのである。

主人公たちがロマンチックな愛を求め、その歓喜と満たされぬ想いで一喜一憂するのと平行して、Touchstoneは‘poetical’という言葉も知らず美貌にも恵まれていないが、貞節に見える田舎娘 Audrey との結婚を決意する。彼は何もない森の中で‘horn-beasts’（ここでは鹿と不義を働かれた夫の洒落）のみを出席者にして式を挙げるつもりでいる。彼はしきりに角にこだわり、それは妻の持参金（3幕3場）であって、結婚する男の宿命であるし、角は独身男の何もない額よりも名誉なことだと結論する。Jaques に結婚の意志を聞かれると、彼は

As the ox hath his bow sir, the horse his curb, and the falcon her bells,  
so man hath his desires,... (3.3.71-2)

と答える。動物にも宿命的に逃れられないものがあるように、人間にも欲望という厄介なものがあり、それが自分の結婚の動機であるという。森の中で粗末な結婚式を挙げる理由について、彼は傍白で「まともな式を挙げなければ、将来妻と別れるよい口実になる」と本音をもらす。式を突然延期し退場する時も、カプレットで Audrey と ‘bawdry’（貞節の欠如）で脚韻を踏ませたり、牧師には詫びるどころか戯れ唄を歌いながら立ち去る。ここで道化がしていることは、主人公たちの牧歌的でロマンチックな恋愛に対するパロディもしくは偶像破壊である。宮廷のみならず森においても、まだら服の彼は中心に対して周辺、社会的には底辺に位置する存在である。彼は道化として無責任、不真面目、無秩序、破壊、反理性や欲望などを具現しているだけでなく、主人公たちが求める理想的でロマンチックな愛を転倒させ、現実的で皮肉な視点でそれを眺める。そして彼らのロマンチックで情熱的な愛に、欲望や肉体的な要素が大いに含まれていることを観客に思い出させる。Shakespeare の道化たちはたいい喜劇的大団円の結婚騒ぎの外側に留まる。道化の性と結婚について、William Willeford は興味深い考察をしている。要約すると、道化はたとえ男である時でも、一人の女性と親しく持続的な関係を結ぶことができず、結婚に見いだされるいかなる安らぎや完成にも身を落ち着けることができない。一般に、道化の性は、英雄の求婚と女性獲得の経過とはほとんど無縁な表現形式だけを見いだす。<sup>21)</sup> Audrey に対する Touchstone の上述のような行為は、道化全般に共通

する特徴であると同時に、この劇において主人公たちの恋愛観を逆転させるだけでなく、補完的な機能も果たしているといえる。

Touchstone はいつも相手をからかう機会を探していて、特に粗野な田舎者 (clown)<sup>22)</sup> は彼の本能を強く刺激するようである。5幕1場冒頭では、William に対して故意に難しい表現を用いて威圧的に迫る。頭の鈍い William は圧倒されて言葉少なに退散するが、道化の態度に多少意地の悪さはあっても決して悪意はなく、wise fool らしい振舞いは土間席の観客に大いに受けたであろう。

劇が結末に近づくと、ヒロインは男装を解き複雑に絡み合ったいくつかの問題を一挙に解決せざるを得なくなる。彼女は恋人たちに時間と場所を指定し、会場に集合するよう約束させる。彼らは約束通り集まってくるが、そこに Touchstone と Audrey の姿もある。皮肉屋の Jaques はそれを見て新たな大洪水と方舟を連想し、道化のカップルを「非常に奇妙な動物のつがい」とか「阿呆ども」と呼ぶ (5幕4場)。口の悪さは彼の特徴であるが、道化の鋭い機知や知性は彼なりに十分理解している。たいてい道化は脇役として大団円までに舞台を去るか、留まっても台詞はほとんどなく主人公たちのアクションに加わらないが、彼は Audrey とともに彼らの結婚式に参加し、幸福な結末に色を添える。彼は老公爵に式に参加した理由を次のように話す。

I press in here sir, amongst the rest of the country copulatives, to swear and to forswear, according as marriage binds and blood breaks. A poor virgin sir, an ill-favoured thing sir, but mine own; a poor humour of mine sir, to take that that no man else will. Rich honesty dwells like a miser sir, in a poor house, as your pearl in your foul oyster. (5.4.54-61)

つまり、結婚が二人を結びつけ本能が二人を引き裂くままに、誓いを立てたり破ったりしたかったからである。不細工な Audrey に手を出したのは、自分のどうしようもない気紛れによるものだと言っている。最後に、女性の貞節というのは、美しい真珠のように醜い住みかに宿るものだ、という面白いことわざで締めくくる。全体として、内容のみならず、‘swear-forswear’, ‘marriage-blood’, ‘bind-break’, ‘rich-poor’ などの言葉の対比、‘honesty-dwell-house’ における擬人法、‘like a miser’ などの直喩、ことわざが喚起する面白いイメージなど、ユーモアと技巧的な言葉の使い方において注目すべき箇所が少なくない。彼は

喧嘩の7段階についても面白いことを言うのだが、それを聞いていた老公爵は感心して言う。

He uses his folly like a stalking-horse, and under the presentation of that he shoots his wit. (5.4.105-6)

Touchstone はまさに阿呆を装った賢明な道化なのである。結婚の神と本来の姿に戻った Rosalind と Celia の登場により、劇は一挙に結末を迎える。Jaques を除くほとんどの人物は、森での浮かれ騒ぎ (rustic revelry) にしばし興じる。立ち去る時 Jaques は道化に、「君は妻との口論に委ねよう、というのも君の愛の航海はたった2ヵ月分の備えしかないからね」と、真実を言い当てたかのような言葉を残す。この喜劇は、道化と田舎娘のような異色のカップルをも受け入れるほど、寛容で陽気な休日精神が支配し、結末では新しい秩序と調和のある社会を確立するとともに、その社会の存続を感じさせながら幕を閉じる。

前にも触れたが、作者はこの劇で牧歌的な世界における恋愛とその成就、言い換えると、牧歌的でロマンチックな恋愛を通して達成される調和と幸福の一つのビジョンに中心的な関心を抱いている。平板になりがちな牧歌劇に広さと奥行を与えるため多様な人物が登場するが、中でも Touchstone は重要な人物の一人である。彼の言動は賢明な職業道化、劇に登場する舞台道化、さらに、試金石としての機能という観点から捉える必要がある。彼は、“The fool doth think he is wise, but the wiseman knows himself to be a fool.” (5.1.30-1) ということわざを知っており、自分が愚かであることを認識している賢者である。彼がこの劇で最も賢明であるか否かは分からないが、常に自分の役割と観客の目を意識しつつ行動している。彼はまだら服を着た脇役として、劇のアクションから一定の距離を保ち、現実的で批判的な目で恋する者の愚かさや滑稽さなどを、主にパロディや皮肉な表現でからかう。辛辣に聞こえることがあっても冷笑家の Jaques とは異なり、彼のヒューモリスティックなぬくもりとすべてが許される特権によって、彼の周囲は穏やかな笑いの空気で包まれる。意外にも、彼は Audrey と主人公たちの結婚式に参加するが、この行為も主人公らの牧歌的な愛を滑稽なカップルによって茶化し転倒させるための行為である。田舎娘との結婚はある意味で分相応であるし、その動機を情欲に帰したのは道化としてごく自然で意図的な行為であり、主人に仕え楽しみを提供するという宮廷で

の本来の仕事にも通じる。Audrey との結婚は一時的なものだと傍白で本音をもらしても、彼の不真面目、無責任や冗談を非難できない。道化はもともと通常の道徳的観念とは無縁の存在で、論理と非論理、理性と反理性、現実と虚構といった二つの世界に気紛れに足を置く、矛盾した捉えがたい存在だからである。Shakespeareはこの後、同じタイプの道化を何人か創造する。*Twelfth Night*では祭りを暗示する Feste に Touchstone とは異なる活躍をさせて別な可能性を追求し、*All's Well That Ends Well*では Lavache により問題劇の世界での道化活用の可能性を試しているが、*King Lear*で職業道化が悲劇においてどこまで活用できるかという点で、その可能性を極めたといえるほど見事に劇世界に融合している。最初の職業道化 Touchstone も、この劇に「非常によく融和されていて時々真の参加者」<sup>23)</sup>に思えるほど劇世界に組み込まれているので、この道化を取り去った *As You Like It* はスパイスが効いていない料理のように、きわめて味気ないものになると結論できる。

## (注)

- 1) Agnes Latham (ed.), *The Arden Shakespeare: As You Like It*, Methuen, 1975, p.xxxv.
- 2) Kenneth Muir (ed.), *Shakespeare: The Comedies*, Prentice-Hall, 1965, p.59.
- 3) Patrick Swinden, *An Introduction to Shakespeare's Comedies*, Macmillan, 1973, p.110.
- 4) Peter G. Phialas, *Shakespeare's Romantic Comedies*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1966, p.209.
- 5) C.L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy*, Princeton, 1959, p.238.
- 6) John Wilders, *~New Prefaces to~Shakespeare*, Basil Blackwell, 1988, p.152.
- 7) *The Arden Shakespeare: As You Like It, op. cit.*, Act 2, Scene 1. 以後、作品からの引用はこの版による。
- 8) John Russell Brown (ed.), *Shakespeare: Much Ado About Nothing and As You Like It*, Macmillan, 1979, p.188.
- 9) Kenneth Muir, *Shakespeare's Comic Sequence*, Liverpool University Press, 1979, p.89.
- 10) 『シェイクスピア・ハンドブック』, 三省堂, 1987, p.244.

- 11) Malcolm Bradbury & David Palmer (ed.), *Stratford-Upon-Avon Studies 14: Shakespearian Comedy*, Edward Arnold, 1972, p.168.
- 12) Alexander Leggatt, *Shakespeare's Comedy of Love*, Methuen, 1974, p.207.
- 13) Robert Hillis Goldsmith, *Wise Fools in Shakespeare*, Liverpool University Press, 1974, p.15.
- 14) *The Arden Shakespeare: As You Like It, op. cit.*, pp.lii-liv.
- 15) 当時、宮内大臣一座は10人前後の株主を兼ねた幹部俳優から成り、上演のために脇役用の役者、楽士、裏方、衣裳方やプロンプターなどを雇った。脇役及びエキストラとして雇われた人はそれぞれ6-7人、10-12人であったろうと考えられている。(Cf.『シェイクスピア・ハンドブック』前出、pp.222-23) 登場人物が多い劇の場合、一人が脇役を何人かこなしたといわれている。この喜劇の場合、Armin が道化と時々歌を歌う Amiens の二役をこなしたことは大いにありうる。これら二人が舞台上で同時に現われるのは5幕4場のみで、その時は Amiens には台詞がないので、別人が交替すれば解決する。
- 16) *The Arden Shakespeare: As You Like It, op. cit.*, p.lxvii.
- 17) John Palmer, *Political and Comic Characters of Shakespeare*, Macmillan, 1964, p.383.
- 18) 道化の服装に関しては次の文献が参考になる。Leslie Hotson, *Shakespeare's Motley*, Haskell House, 1952; E.W. Ives, 'Tom Skelton--a seventeenth-century jester', *Shakespeare Survey* 13, 1960; William Willeford, *The Fool and His Scepter*, Northwestern University Press, 1969, Chapter 2.
- 19) *The Arden Shakespeare: As You Like It, op. cit.*, footnote 10.
- 20) R.P. Draper, *Shakespeare: The Comedies*, Macmillan, 2000, p.38.
- 21) William Willeford, *op. cit.*, pp.174-75.
- 22) *OED*による 'fool' の定義はここでは省略するとして、あえて最も簡単にいうと、fool は全面的に判断力ないし分別に欠けているのに対して、clown は特に社会的礼儀作法に関して判断力ないし分別に欠けている。後者はもともと農夫をいい、そこから田舎者、そして田舎者は都会人には何となく滑稽に見えるので、滑稽な人間、道化師、お抱え道化をさした。(William Willeford, *op. cit.*, p.12.) また、舞台では clown は粗野な地方の言葉、時に 'Cotswold speech' と呼ばれる、ある種の田舎の方言で彼の仲間から区別

され、たいてい舞台の道化とは違った服装をしていた。(Robert Hillis Goldsmith, *op. cit.*, p.40.)

- 23) Bente A. Videbæk, *The Stage Clown in Shakespeare's Theatre*, Greenwood Press, 1996, p.85.